

1. 日時：令和3年11月9日（火）10日（水）
2. 会場：群馬会館（群馬県前橋市）
3. 募集定員：84名（一般：60名 福祉職従事者：16名 学生・新任者：8名）
4. 参加人数：87名（一般：26名 福祉職従事者：16名 新任者：4名）（講師：2名 関係者：39名）
5. 共催：開催委員会：（社福）榛桐会 （社福）かんな会 （社福）館邑会 （社福）あざ美会  
（社福）はるな郷 独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、当初、9月に予定していた高知と熊本での共生社会フォーラムの開催を延期せざるを得ませんでした。関係の皆様方のご協力ご支援により、ようやく10月から北海道でスタートし、11月には、群馬県と熊本県において開催する運びとなりました。

群馬では、10月19日（火）に開催委員会を兼ねたメンターおよびメンター補助予定者6名を対象とする事前研修会を高崎市にあるのぞみの園で開催し、フォーラム開催に備えました。開催前日の11月8日（月）には、開催委員会事務局を務めていただいているのぞみの園の事業企画部 企画課 清水清康課長補佐をはじめ、のぞみの園のスタッフのご協力により、速やかな前日準備が行われました。



10/19 開催委員会・事前研修会



11/7 メンター等事前打ち合わせ

初日の9日（火）朝8時30分に開催委員会事務局（のぞみの園）のスタッフが集合し、受付係や会場係などに分かれ、限られた時間内に円滑な動きで準備が進められました。また、開催委員会委員でメンターの皆さんと助言者や全体進行者により、プログラムの確認などの事前打ち合わせを行いました。

一般参加者は、地元群馬県や東京都および東北ブロックの岩手県から、福祉施設・事業所、相談支援事業所および親会の方に参加いただきました。中堅研修には、群馬県にある福祉施設・サービス提供事業所、相談支援機関、福祉関係団体等から16名の参加があり、新任者研修には、群馬県と千葉県の福祉現場職員4名の参加がありました。一般参加者・研修受講者・国の実行委員会委員（大塚晃座長および相模原市市長の増田美樹夫委員）や地元の運営関係者等 合計87名に参加していただきました。フォーラムの方針として“地域主体”を掲げていますが、コロナ禍による制約があるにもかかわらず、地元協力法人のご尽力による事前の周知や準備を含めて昭和5年に建設されたレトロながら機能的な公会堂を会場として確保していただくなど、様々な面で行き届いた配慮をいただきました。



フォーラムは、のぞみの園の木村恵さんによる司会のもと、厚生労働省の高相泰忠企画課課長補佐の挨拶で始まり、一般参加者と研修参加者とが共に参加するプログラムのオープニングとして、ミュージシャンでNPO法人ハイテンション代表かしわ哲さんにより「しあわせになるために生まれてきたんだ」の講演と映像紹介がありました。

講演は、8月のオリンピックの際に無観客で演奏されたライブ映像がバックに流れるなか、かしわ哲さんに人生2度目の“意識の突然変異”をもたらした“さっちゃん”との出会いがロックバンドのサルサガムテープの結成につながったというエピソードからはじまりました。

- ・多くの福祉のコンサートを開くなかで、さっちゃんのような素直な人がたくさんいることに気づいた。打てば響く、まっすぐなファンキーで本当に最高のお客さんなのに、横で押さえつけて鎮める支援をする人がいた。制止されてしまうのは、コンサートにとってじゃまでしかなく、バランスや居心地が悪い。なんて気の毒な方々なのだという気持ちが高まり、施設に押しかけボランティアで乗り込み「バンドをやろう」と声をかけ、27年前にサルサガムテープを結成した。
- ・とにかく自由に楽しくやっても規制することはなく全部 OK ということから始めた。楽しいことを始めるのに、そこに楽しくない「教育的なもの」「訓練」「療育的なもの」という要求的なものや課題はない。乗り越えなければならないものはなく、自分が本当に楽しくできることが出発点。
- ・そこそこの夢に満足させずに、福祉の枠を出て音楽業界で活動を始めたところ、福祉の外の方がはるかに評価が高かった。一番象徴的なのは、今は亡き忌野清志郎さんとの演奏で、「最高じゃないか」「ロックンロールの原型だね」というありがたい言葉をいただいた。
- ・私たちは「全肯定型」福祉事業所、と宣言している。アートもやっていて「あなたの見た世界は、あなたの世界だ。それは、何人も否定できない。否定するべきものではない」としている。見たものだけでなく、自分が感じたことや思ったことから始める。その人が描いたことを否定しない。それを出発点とすることから、いろんなことが解決できていく。
- ・今日一日がいかに楽しく過ごせるかだけを考えて日々の支援をしている。このコロナ禍でロックバンドなどは一番の標的で諸悪の根源みたいに言われ、ライブなど全然できなくて拷問のような日々だった。そのなかで、どうやって今日を楽しく一日できるのかをいつもみんな考えてやってきた。皆さんが出てこられずに在宅のときもオンラインでリズムセッションしたり、パケツの太鼓を持ち帰ってタイムラグがあるなかセッションしたり、とても楽しいミュージックビデオをつくるなどした。そのなかで今年作った「アイタイ」という楽曲がNHKのSDGsのキャンペーンのテーマソングとして世界で歌われている。
- ・何か楽しいことばかりやっていると社会的評価が低く見られがちだが、とんでもない。楽しいことを毎日やるということとは、凄いクリエイティビティが必要で、想像力とエネルギーとセンスが要る。どうすればみんな楽しく生きていくのか、それだけを軸にして考えていくと、支援だけでなく、いろんなことが全部良い方向へ行く。
- ・社会全体をどうするのかというときに、どうやったら豊かになるのか、効率の良い生産性の高い社会になるのか、ではなく、どうやったら自分と自分のまわりの人たちが毎日楽しく生きていくことができるのかを真剣に考えることが大事。楽しいことは、真剣に、一生懸命、まじめに考えないとできない。そのなかで生きていく活力が湧いてくる。
- ・特に若い人たちが、どのように楽しい生き方を、仕事なり家庭なりで営んでいけるのかを考えていく。それだけを考えて仕組みや枠組みをつくっていただけで十分にいろんなことが見えていく気がしてならない。そこを出発点にしていくことが悪いことでも不謹慎なことでもなく、とても真っ当なこと。障害のある人は支援されるために生まれてきたのでは無いし「いつもいつもお世話になっています、ありがとうございます、頑張ります」と頭を下げるために生まれてきたんじゃない。
- ・かたまりの中の障害者じゃなくて、あたりまえだがA子さんであったりB君だったり、自分を獲得して自分の思うように歩き出す。ごめんなさいと頭を下げるためではなく、それぞれに幸せになるために生まれてきた。障害のある人もない人も、もしも幸せになるのでなかったら、なんのために生まれてきたのか、ということを大声で叫んでいる。

講演のあとにミュージックビデオ「ワンダフル世界」の紹介がありました。やまゆり園事件の翌年に、全国のなかまに呼びかけて、約400人の障がいのある方とその周りの人たちが力をあわせました。がちりとお顔と名前を出してこうよ、ネガティブな発言に対して「そんなことは無い。僕たちはとてもこんなに幸せに楽しくやっているんだ」というメッセージが込められた映像でした。

(※映像紹介のあと、即興のブルース演奏があり、会場全体がワンダフルな雰囲気に包まれました)



続いて、実行委員会委員でジャーナリストとして長年活躍された野澤和弘さん（植草学園大学副学長・糸賀財団理事）による「かけがえのないいのちの発信～2021年の福祉の思想の伝え方」の基調講演がありました。

最初に、2016年のやまゆり園事件の概要、死刑囚の主張とその言葉にいまだにショックを受けている状況、福祉関係者の視点（施設での勤務中に起きた出来事や人間関係の中に動機につながる何らかの要因があったと見るのが常識）、刑事裁判で明らかになった被告の感想（障害者はかわいい[肯定的] → 人間扱いされていない、かわいそう[否定的] → 先輩に相談すると「2～3年経つとお前も分かる」 → 重度障害者には生きる価値がない。社会を不幸にする という歪んだとんでもない思想へ転換）、横浜地裁で断定された動機（やまゆり園での勤務経験を基礎として形成された）、やまゆり園内での虐待についてのNHK報道、野澤さんが委員として参加された神奈川県設置による「検証委員会」の調査の経緯と結果（長期間に及ぶ身体拘束の実態等）、やまゆり園事件以降も発生した事案、昨年の実地調査時に見た拘束やヒヤリングを通じて得た職員の本音、マスコミへの問題意識などが紹介されました。

- ・ 育成会の声明文に対して批判や誹謗中傷の投書やメールが結構多くきた。犯人の主張（少子高齢化や医療技術の進歩で社会保障の財源が逼迫し社会の余裕がなくなるなか、重度障害者を養うには、莫大なお金と時間が奪われる）と同じように思う人が多くいるのもやむを得ない。このような主張に対して、我々は深いところから“対立軸”をもう一度構築していかなければいけない。
- ・ 戦後間もない優生保護法による強制不妊の真ただ中・優性思想の暴風のなかで発せられた糸賀思想（“この子らを世の光に”＝どんな重症の子どもたちも光っており自己実現している）を、やまゆり園の事件が起きた今だからこそ、我々が現代の言葉に置き換えてみんなに伝えていかなければならない。
- ・ ただし、時代背景は当時とは異なり人口減少・経済停滞・国の財源不足というなかで、誰が負担を強いられるのかと考える人いてもおかしくない。「ただ存在していることを認めるべき」という考えは、きれいごとや建前であり、納得していない人は多い。生活困窮者や生きにくさを抱えている人が増えて福祉の財源も人も不足している、大変なのは障害者だけでないよ、という本音がある。
- ・ 「内なる優性思想」に煽られる時代で、人工透析患者の治療打ち切りやALS患者への囑託殺人などお金のかかり生産性の低い人たちは要らないという考えによる事件が起きているなか、現実的に命を考える時代であり、なぜ困っている人にカネを出すのか、重度の障害者や認知症の方、難病の人の医療費や福祉の費用をなぜ負担すべきなのか、ということを考えなければいけない。
- ・ 建前ではなく、具体的に踏み込んで考えると、重度の障害者にある潜在的な価値、例えばアートで見られるように豊かな内面世界があり、大江健三郎氏や近松門左衛門など重度障害児の親たちがあらゆる分野で影響を受けている。自分自身、文体に非常に大きな影響を受けている。

続いて、糸賀一雄氏に『この子らはどんなに重い障害をもっていても、だれと取り替えることもできない個性的な自己実現をしている』『その自己実現こそが創造であり、生産である』ということば、新聞記者が丹念な取材でWEBに掲載され



読む人の心が揺さぶられる被害者家族のインタビュー記事、育成会の機関誌特集号に掲載した家族の幸せな写真、刑事裁判でわが子が記号で呼ばれるのを嫌い敢えてわが子の実名と写真を公表した被害者家族のお話を紹介されました。

命の連なりについて、「家族だけでなく支援すべき人と障害のあるご本人、あるいは支援者でなくても何かのきっかけで障害のある人に出会ったときに、やはりそこにいろんな繋がりが出来てきて新しい人生が生まれてくる」というお話があり、その実例として「東大で行っている“障害者のリアル”ゼミで、瞼と唇の動きでコミュニケーションされる ALS 患者の岡部さんからの『体が動かないのは確かに不自由だが、心が動かない不幸の方が、私には耐えられない』君たちの心は動いているのか、という問いかけに学生たちは言葉を失い、価値観を揺さぶられた」という紹介がありました。

さらに、ゼミ参加者で厳しい福祉の現場に飛び込み、『学歴社会を勝ち抜くための価値観で生きてきたが、やっと本物の社会と繋がることができた』という青年と、同じく施設で相談員として働く LGBT の特性がある青年のお話や、高校への出前講座で、野澤さんの講義やかしわ哲さんのライブの授業を受けた生徒への“福祉の印象“のアンケートで、授業前の『何とも思わない・障害者を助ける仕事・ただただサービスする仕事・大変な仕事』から、授業後は『なんだかすごい・人の心を動かす仕事・人生をサポートする仕事・大変だけど楽しいこともある仕事』になったという紹介がありました。

この背景として、「今の子ども社会は大変。いじめ・不登校・小中高の子ども自殺者・虐待いづれも過去最多という生きにくさがある大変な時代に子どもたちは生きている。身体的幸福感と精神的幸福感の大きなギャップ、高い自己有用感・低い自己肯定感、日本社会では、役に立っていると思わないと生きていけない。我々は、重い障害のある人の存在を活かしていない」というお話がありました。

最後に、糸賀一雄氏のことば『知的障害のある子の生まれてきた使命があるとすれば、それは「世の光」となることである。親も社会も気づかず、本人も気づいていないこの宝を、本人のなかに発掘して、それをダイヤモンドのように磨きかける役割が必要である』を紹介され、「言葉のない重度の障害者は「沈黙と微笑み」で社会に発信しており、支援者は「知性や創造力や芸術性や自覚された覚悟」を持って重度の障害者の「沈黙と微笑み」の意味、行き詰った近代文明の社会のなかで暗示するものが多大であることを社会に伝えていってほしい」というメッセージで基調講演が終了しました。



### 何が問われているのか

「障害者施設に勤務してわかった。心失者は社会を不幸にする。私に賛同してくれる人は多いはず」(福松被告)

- ・育成会の声明文に対する誘惑中傷
- ・福祉職員から被告に賛同する書き込み
- ・自分たちの責任として事件を見ない福祉でいいのか

★ このような思潮に対して、深いところから「対抗軸」をもう一度、構築していかなければならない。この国の福祉の原点を思い出し、福祉の仕事のすばらしさを確認していくとき。

この子らはどんなに重い障害をもっている、だれと取り替えることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間として生まれて、その人なりの人間となっていくのである。

その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であることを、認めあえる社会をつくらうということである。

(糸賀一雄)

### 重度障害者の価値に私たちが気づいていないだけ

- ・「価値」は時代によって変わる
- ・すぐに答えを求めない＝長い時間軸でなければわからないもの
- ・問題解決をめざさない、切らない
- ・すぐに役立つものは、すぐに役にも立たなくなる
- ・携帯がもたらしたものを、携帯を捨ててわかったこと



初日の午後には、NHK 厚生文化事業団の福祉ビデオライブラリーに昨年登録された NHK スペシャル・ラストメッセージ第6集「この子らを世の光に」(2007年3月放送)を上映しました。日本初の公的福祉施設である「近江学園」の設立に尽力した糸賀氏と糸賀氏を支えた池田太郎氏や田村一二氏らの紹介と、今日の入所施設や地域での生活支援の取り組みの紹介があり、障害のある子どもたちと寝食を共にし、不断の研究と実践に基づき編み出された思想や残された言葉が、時代背景が異なるものの、現代の福祉に通じる普遍的なものであることを学びました。

一般参加者と研修参加者がともに参加する共通プログラムが終了したのち、学生・新任者グループと中堅職員による語り部養成研修グループに分かれて、2日間のグループワーク研修が始まりました。



サポート：大平



進行：御代田

学生・新任者グループは、新任者4人が参加し、初日は、バリバラの玉木幸則さん不在の中、(福)グローの御代田太一さん(進行役)と大平眞太郎さん(サポート役)により進めました。まずは時間をかけて自己紹介。それぞれの職場の紹介から「なぜ福祉の仕事をしたのか」など、お互いをじっくり知る時間をとりました。それから全体プログラムの感想を語り合い共有するなかで、話は自然とお互いの現場の話になりました。「本人が楽しむことを考えるのは意外に難しい」「仕事は思っていた100倍大変だけど、何とも言えない達成感に満ちている」など本音が見えてきました。



語り部養成研修には、サービス管理責任者、生活支援員、相談支援専門員、地域包括支援センター主任介護支援専門員、地域生活定着支援センター所長、法人代表など多彩な職種の16人が参加しました。密を避けるため受講者は、1グループ4人と人数を限定し、4つのテーブルに1名ずつメンターを配置しました。ワーキンググループ(WG)により開発した研修プログラムに基づき、千葉県で社会福祉法人化をめざしている㈱ベストサポートの竹嶋信洋さんが、とんがるちから研究所の近藤紀章さんと竹岡寛文さんのサポートのもと、ワークシートとスライドを用いて進行しました。メンターは、全員が地元群馬県からの初参加で、就労継続支援B型GOODJOB所長の中村建児さん、就労継続支援B型エコー管理者の岡田健太郎さん、重症心身児者施設さわらび療育園相談支援センターの丸橋道代さんおよび施設入所支援・生活介護事業所ひのき荘けやき寮の岩丸舞さんの4名がグループのテーブルにつきました。さらにメンターのサポートとして施設入所支援・生活介護事業所かなの里施設長の島野健太郎さんおよびのぞみの園事業企画部の五十嵐敬太さんの2名が配置につきました。また、実行委員会委員で座長代理の久保厚子さん(「一社」全国手をつなぐ育成会連合会会長)、(社福)岩手県社会福祉事業団の白畑勇さん(たばしね学園園長)および滋賀県の(社福)六心会の奥村昭さんが助言者として参加し、運営をサポートしました。

最初に、言語以外のコミュニケーション手段により誕生の月日順に並ぶ、という恒例のアイスブレイクでグループメンバーの関係づくりから始まり、初日は、①基調講演等を見て感じたこと、共生社会とは何か等の個人ワークと模造紙とポストイットを使用してのグループ共有、その状況についての発表がグループごとに行われました。



全体進行：竹嶋



岡田グループ



丸橋グループ



岩丸グループ



中村グループ

初日のおわりには、翌日のセッションに向けて、相模原障害者殺傷事件を振り返り、様々な意見や価値観と向き合う時間



を持ちました。研修テキストには、事件直後に発せられた全育連のメッセージとそれに対する手紙やメールの内容や、事件を丹念に追って報道した神奈川新聞の記者懇談会記録を掲載していますが、助言者の久保さんから受講者に向けて、事件直後に報道された犯人の「障害者は生きている価値がない」という言葉に対して、本人と家族の団体として、また重度の障害がある息子を持つ一人の親として久保さんが受けた衝撃や憤りについてのお話がありました。また、施設の代表として日ごろ親御さんからの話を聞く立場におられ、ひとえに我が子のことを想う親御さんへの向き合い方についてのお話がありました。ご本人をお茶のペットボトルに例えて、「親や支援者の立ち位置によって見え方が違い、すべてが正解でありすべてがこの人であること、周りの人が言うことは、全部がその人が持っていることであること、障害支援区分が6の最重度の方であっても場面や人によって対応を変える力があることなどを分かったうえで支援していただきたい」というお話がありました。

また、親自身にも他の子と比べてしまう差別的意識があることや説明しきれないモヤモヤ感を持ちながら活動していること、思いが言葉には表れてこない重症心身障害児者が多くおられるびわこ学園初代園長の岡崎英彦さんが職員からどうすればいいかを尋ねられたときに「本人さんは、どう思てはるんやろ」と職員に投げかけておられたエピソードの紹介があり、「この人が今何を考えているのか、どう感じているのかということに自分の気持ちを持って行き寄り添って考えていくことが大事」「家族は、支援者と一時期に議論はしても対立したいとは思っておらず、どうすればいいのかと同じ方向を向いて、本人のためにやっていきたいと思っている」というお話があり、「明日のやまゆり園事件を通して、みんなが持っているモヤモヤを深く考えると、もっとモヤモヤするかも知れないが、それを持ちながら支援していくことが大事」という熱いメッセージをいただきました。

また、助言者の奥村さんからは、テキスト資料に収録した糸賀語録 50 篇を取りまとめた経緯などについて述べられ、「言葉はすごく大事。この研修では、とにかく言語化していき、それを共有し、言葉の違いを確かめていく。言葉に悩んだときは、言葉に帰って手掛かりにする。もし糸賀語録が皆さんの心に届くのであれば嬉しい」というお話があり、初日の幕を閉じました。



メンター：岡田



メンターサポート・助言者の皆様：島野・白畑・奥村



助言者：白畑



メンター：中村

二日目は、②やまゆり園事件をどう受け止めるのか、全育連の声明への反応に対して各自が思うところをグループで共有することから始まり、自らの感情の源泉を探り、答えに窮する語りかけを行うセッション ③職場や地域で取り組む基本理念普及のアクションプランを各自が考え、グループでブラッシュアップするセッションが行われました。





メンターサポート：五十嵐

2日目の午後セッション開始前に、開催委員会事務局の皆様の写真撮影と、新任者・中堅職員グループの皆さんの写真撮影を行いました。受講された皆さんの清々しい笑みが、モヤモヤ感を抱きながらも、明日からの行動につながる手ごたえを感じたことを表しています。



新任者グループは、玉木幸則さんも合流し、「障害とは?」「福祉とは?」「共生社会とは?」をめぐる3本立てのディスカッションを行いました。午前、午後それぞれに玉木さんからのお話が入り、受講者は、普段使わない思考回路をフル回転させながら、福祉の仕事の意味や社会の中での位置づけを見つめ直し、2日間のグループワークの幕を閉じました。



進行：玉木



中堅職員グループの二つ目のセッションでは、答えに窮する問いの例題として「イライラして手を出してしまう職員からの問い」があり、助言者の大平さんから「この研修は、困ってあたりまえ。困ることに対して少しでもできることはないかなと考える研修。どの例題にも普遍的な答えがあるものではないというのが大前提。今の自分であれば、どう答えるのかを考えるもの。昨日の講演を聞いた皆さんであれば、犯人の（正しいと確信した）行為と重ね合わせた問いが、本来重なっていないことがわかるはず。最低なのは「まだイライラしているのはまし。そのうち何にも感じないで」という答え。すべてをあきらめた結果、積極的な行為に及んだ犯人と、まだあきらめていない人との違いをきちんと整理して伝えてあげることが大事。そういう前提がなかったときに答えに窮してしまう。自分にも同じ感情があつて自分なりに乗り越えているが、答えに窮してしまうのは、その乗り越え方を自分の言葉にできないから。そのようなことを分解し解説し一緒に考えてあげるという考え方で次に進んでいただきたい。」というアドバイスがありました。

また、助言者の白畑さんから「そもそも私たちの仕事自体に正解がなく、常に問い続けている。誰かに問いかけるのではなく、結構自分のなかで消化していて、あまり外に出さない。今日は、皆さんの潜在的な意識を外に出した非常に重要で価値のあるセッションだった。頭に浮かんだのは、中島みゆきさんの『エレーン』の『生きていてもいいですかと誰も問いたい、その答えを誰もが知っているから誰も問えない』という歌詞。なんて言われるかわからないから問えない、ということにならないよう、信頼関係をベースに問いを引き出してほしい」という講評がありました。

最後に語り部養成研修のグループワークの全体進行役の竹嶋さんから、研修全体の振り返りがあり、「人は人との関係のもとでのみ生きていて、人と人との関係のなかであれば生きていける。いのちを大切に守り育む、そういったことに人との関りが不可欠。ただし何らかの環境や事情により人との関りが難しくなってしまう、そこからの歪みが生じる方もいる。いのちそのものが大切である、ということをお大原則・原点にして、それを眨める価値観や脅かす存在に立ち向かえる力を備えることを目的とする研修プログラムだった」という締めくくりと「研修で『感情の源泉』、これからも問い続けて、掘り下げて、向き合っていたきたい」という参加者へのエールがありました。

フォーラムの閉会にあたって、地元開催委員会事務局の独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設の富田候之さんから閉会の挨拶があり、全てのプログラムが終了しました。



今年度のフォーラムがコロナ禍のなかで、日程が遅れながらも10月のとちぎ帯広でスタートし、11月の群馬においても成功裏に終えることができたのも、これまで熱心にプログラムを考え、実施を支えていただいた新・旧実行委員会委員やワーキンググループの皆さんと講師や受講者のみなさんとともに、何よりも絶大なご支援ご尽力をいただいた地元協力法人やメンター・助言者の皆さんのおかげです。

とりわけ事務局を務めていただいたのぞみの園の皆様の献身的な働きと心配りに対しまして、言葉では言い尽くせませんが、心から感謝を申し上げ、報告といたします。ありがとうございました。